

イルピンのすべり台



鈴木 一生

米首都ワシントンにあるウクライナの文化交流施設「ウクライナ・ハウス」の庭に5月上旬、一つのすべり台が設置された。

初夏の穏やかな日差しで銀色に輝くが、近寄って見ると砲弾の破片や銃弾などが降り注いだ無数の跡が生々しく残っている。

設置に協力した米東部マサチューセッツ州ナンタケット島を拠点にする人道支援団体によると、もともとすべり台はウクライナの首都キーウ（キエフ）近郊のイルピンにある集合住宅に囲まれた公園に置かれていた。ロシアが2022年2月に侵攻を始めた後、この支援団体が戦争の悲惨さを伝えようとイルピンの自治体の協力を得て米国に持ってきたという。イルピンは多数の民間人が殺害されたブチャに隣接し、侵攻直後にロシア軍の首都侵攻を食い止めた激戦地として知られる。ロシア軍は地域一帯から22年3月末に撤収したが、イルピンでも民間人300人近くが犠牲になったとみられている。

今年2月に取材でウクライナを訪れ、イルピンに

も立ち寄った。道路沿いにはロシア軍のミサイル攻撃や砲撃で半壊した集合住宅や商業施設、黒焦げになった民家などが並んでいた。建て替えや修繕が進んでいる建物や住居もあったが、激しい戦いの爪痕が至るところに残されていた。

ウクライナでの取材を終えて米国に戻ってきて気になったことがある。侵攻から1年が経過し、どこか人々のウクライナ侵攻への関心が薄れてきていることだ。24年米大統領選で共和党の有力候補と目されるフロリダ州知事が3月に「ウクライナとロシアの『領土紛争』にこれ以上巻き込まれることは、国益ではない」と述べたことにも驚いた。

すべり台を眺めながらそんなことを考えていると、偶然にウクライナのオクサナ・マルカロワ駐米大使と居合わせた。マルカロワ氏に米世論について尋ねるとこう返ってきた。「ウクライナでは今この瞬間にも人々が苦しんでいる。多くの子供も犠牲になっている。すべり台を見て少しでも現地の状況に思いをはせてもらいたい」。本来なら子供たちの遊ぶ声に囲まれていたはずのすべり台は、米国をはじめとした国際社会にウクライナを支え続ける覚悟を問うている気がした。